

日 時：平成31年3月27日(水) 13時30分～15時05分

場 所：湯梨浜町役場 講堂

出席者：戸羽委員長、中村副委員長、信原委員、山根委員、長委員、福井委員、三ツ田委員、福井委員、米増委員

(事務局)

山田課長、洞ヶ瀬センター所長、岡本課長補佐、植田副主幹、佐々木主事、戸崎社会福祉士、米原生活支援コーディネーター、田中主任介護支援専門員、石坂主事

計 18 名

1 開 会

2 あいさつ

事務局：みなさん年度末のお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。30年度第3回生活支援体制整備協議体会議を開催させていただきました。2年目を迎える事業で本格的なスタートは30年度からになるかと思えます。30年度1年間やってみまして、手探りな事業でもあり、なかなか取組が進まない面も多々ありました。そういった反省点も踏まえながら、30年度の事業報告31年度の事業計画について協議をさせていただきたいと思えます。また、別紙でつけておりますが、例年2月に要介護認定や事業対象者の認定を受けておられる方を除いた65歳以上の方を対象に、基本チェックリストを実施しておりますが、今回それに「地域支え合い活動等に関するアンケート」を同封させていただきました。回収が終わり、これから集計していくところではありますが、地域ごとで困りごとを浮き彫りしていけたらと思っております。それについても、また後ほどお話しさせていただこうと思えますので、よろしくお願ひします。

委員長：みなさんこんにちは。早いもので、30年度も1週間もないようなところですね。最近、人口がどんどん減ってきているように感じる。高齢者は減っており、子どももあまり増えていない。そうすれば自然と人口は減っていく。私は宇谷ですが、ここ何年かは640～650人くらいいたが、540～560人まで人口が減ってきている。葬儀場の方にも年に20回くらい行っている。どんどん寂しくなるなと思っている。そういった状況ではありますが、どうやったら生活しやすくなるのか、その辺、自助や互助を考えていく必要がある。新元号ももうすぐ発表となり、時代が変わるんだなと感じる。地域の中にも、全体の年齢が上がっていると感じる。この事業についても説明があると思えますが、普段思っていることやこうした方がいいということ等、忌憚のないご意見をお願いします。

3 協議事項

(1) 平成30年度生活支援体制整備事業報告

事務局：資料に基づき、説明。

委 員：アンケートの結果については広報誌で発表するのか、それとも各地区に出向いて説明するのか。

事務局：アンケートについては記入者の集落を記載するようになっているため、地区ごとに分析し、見やすいような形で示せたらと考えている。それを元に地域で話ができるようなことを想定している。また、ホームページでも結果を公表する等、なんらかの形でみなさんに見ていただけるように方法を検討していきたい。

町報は紙面が限られているため、アンケートの結果全部を載せることは難しいが、主だったものを紹介することはできる。ホームページであれば、全体を載せることができるので、そういった方法は活用していきたい。

委 員：ホームページは見られる人が限られているのではないかと。

事務局：アンケートもボリュームが大きいので、全部の結果を町報に載せることは難しいので、主だったものや皆さんに知っていただきたいことを抽出する等、方法は検討していきたい。地域の区長さんからは集計結果を知りたいという連絡ももらっている。

委員：区長以外の人からも、このアンケートの結果についてはなんらかの形では返してほしいという声を聞いている。

委員：結果について、サロンの世話人にも情報をくれたら、サロンの中で話をすることができる。そういうような方法も考えてほしい。

事務局：わかりました。

委員：町全体はもちろん、最低限、自分の地域がどんな状態なのかはできるだけたくさんの方が知る必要がある。旧3町村でも特徴や違いがあると思うので、そこについても知る事ができればありがたい。

事務局：区の特徴がわかれば、区長としてもどういった対策をとらなければいけないのか考えるきっかけにもなる。区長は保健福祉会の会長も兼ねているところが多いので、その結果を区長に返していくのもひとつの方法かもしれない。例えば、羽合地区全体の傾向とその区だけを抜き出した傾向を比較することができれば、区として取り組まないといけないことが明確になってくると思う。そういったことに気付いてもらえるよう、アンケート結果を活用していきたい。

委員長：地区の中で集まる機会にどういう傾向が伝えることはよいと思う。アンケートのなかにはオリンピックのことやいろんな質問があった。

事務局：アンケートが固い質問ばかりになってしまうので、息抜き用に違うものも含ませてもらった。今後、アンケート結果をなにかの会で発表させていただくことがあるかもしれないので、そういったことを想定して、導入部分に活用できそうな興味をひく質問も混ぜさせていただいた。

委員長：30年度の事業については、ほかになにか聞きたいことや質問はありますか。第2層の取組は保健福祉会の活動が中心となるとあったが、保健福祉会の活動はサロンが中心となるのか。

事務局：サロンだけが保健福祉会ではない。保健福祉会で社協がお願いしているのは、サロン活動や見守り、役員会である。保健福祉会の事業としては平成16年から活動している。第2層であがってきた問題点を町の施策として検討していこうという思いがあったが、まだその活動の創出には至っていない状況である。倉吉市高城ではNPO法人を立ち上げて買い物困難者に対して有償運送を始めたりと活動している。そういったところまでいけば、成果として目に見えてくる。買い物に困っているという声はいろんなところで耳にするが、なんらかの方法で買い物に行っているという現状もある。乗り合いバスについてもそれまでは利用者は横ばいであったが、最近利用者が増えてきている。

委員長：有償運送はボランティアとなるのか。

事務局：ほぼボランティアという形になっている。有償運送といっても、福祉有償運送と一般の有償運送と2種類がある。高城でやっているのは買い物に行く支援を地域の住民がNPO法人を作り、1kmいくらと料金を設定して行っている。タクシー料金より低価格で行っている。

委員長：社協の地域福祉活動計画の推進協議会にておいても移送サービスについては、地区で互助的にやっていたかなければいけないという風が上がっていたはずなのに、検討終了になってしまっていた。計画期間はきちんと検討していく必要がある。町の地域福祉計画でも上がっていると思う。

委員：地域ニーズがあるのに、検討が中断しているのはよくない。

事務局：国の方も規制緩和の動きがあり、自家用車で送迎ができることを検討している。

委員：送迎はリスクがあることでもある。

事務局：買い物はついでに一緒に乗せていくことができても、病院となるとついでに対応することが難しい。

委員：免許返納した高齢者は困ることが出てくる。どこの地域でも出てくる問題ではある。

事務局：東部の方では自動運転の実証実験に取り組んでいた記事が新聞に出ていた。そういった時代に今後なっていくのかもしれないが、まだ時間はかかる。

委員長：アンケート結果についてはいろんな方法で結果を公表してもらえたらよい。

委員：回収率はよいのか。

事務局：保健推進員の協力もあり、回収率は高いが、中には未記入で返ってくることもある。

(2) 平成31年度生活支援体制整備事業計画

事務局：資料に基づき、説明。

委員：支え合いマップについて、災害時要支援者対策事業という取組であるという説明であったが、うちの区では災害よりも日常的な支援を考えて作成しているがどうなのか。

委員：支え合いマップのは「わが町支え合いマップ」という名称であったが、中部地震が起きたり、全国的にも災害が増えていることもあり、日常的なことだけでなく、災害時のことも考えて作成できるよう、いまでは「災害時要支援者対策事業」となっている。内容については変わらない。

委員：名前がそうであればそういうとり方をしてしまう。地区によっては災害時のときはこうだと取り決めても普段の日常のことは関係ないという風に思っておられる方もいた。それでは不十分ではないかと思う。地区のなかでも、親戚だからという理由で離れたところに住む人を見守り役として考えていた。近くに住む人が日常的に見守るようなことが大切であると思う。

事務局：日常の見守りから災害時にわたるまで、支援が必要な方をマップに落として支援していくことがそもそもの目的である。そこは変わらないが、事業の名称だけが2、3回変わっている。

委員：以前、わが町支え合いマップという名称として事業を行っていたが、それでは地区の中の若い世代が必要ないように感じてしまう傾向があった。災害時要支援者対策となれば、ひとごとにならず、助け合わないといけないというように感じてもらうことを狙っている。

委員：支え合いマップは31集落で作成済とあるが、町内には75集落あり、半分以下の数字である。取組を広げるのは難しいか。

委員：これは中部地区では多い方の数字となっている。がんばっている方だと思う。

委員：愛の輪協力員の会について、単独で会議を開くのはよいことだと思う。

委員長：社協ではいままでやっている事業を継続しながら、いろんな話合いをもち、情報を共有しながら、コーディネーターを中心として進めていくということによいか。

委員：旧町村単位で生活支援コーディネーターを配置している。

委員長：コーディネーターを中心に情報が集まってこないといけない。そういう形にならないと、いけないと思う。集落の中でどのような体制で支援が行われているのか把握をしていく必要がある。

委員：保健福祉会のメンバーは毎年変わるのか。

委員：地区によって、変わるところはある。

事務局：以前、福祉推進員にアンケートを実施したことがあったが、福祉推進員自身がどんな活動をしてよいかかわからないという声があった。そういう実態を踏まえて、福祉推進員や愛の輪協力員への研修を取り組む必

要がある。役員を複数年していく方が活動は充実していくと思うが、そうはいつでも区の事情があるため、難しい部分がある。

委員：そもそも協議体では2層で吸い上げられた意見と協議、検討するとあるが、それをどう結論づけたいのか。この会の役割がよくわからない。

事務局：この事業の目的は地域のなかで足りない支援の創出である。いまある介護保険や公的サービスだけでは地域の暮らしを支えていくことが困難となっていく。住みやすい地域であるためにどうしたらよいか、生活支援コーディネーターを中心として協議体で話し合いを重ねていく必要がある。本来は協議体において、今ある支援の見直しや必要とされる支援の創出について協議を行うことが役割であるが、現時点では地域の実情や課題の把握が不十分であるために、踏み込んだ話し合いも難しい状況になっている。ぼんやりと困っているという情報があっても具体的にどこがどう困っているのかということが明確でないため、論点を絞り切れていない。

委員：抽象論になっている。協議体の開催により、情報交換ができれば、委員も実態が把握でき、こうした方がいいのではないかなという議論ができる場でないといけないと思う。

委員：われわれが地域でどうしてほしいのか意見を吸い上げて、それをこの場に持ちよって話し合うということだと考えている。

事務局：すべての課題に対して町で対応する必要はないと思っている。地域の困りごとなので、地域の中で解決できるのが一番良い。それを解決するためにはどうしたらよいか、というアイデアをこの場でいただきたい。

委員長：何をしたらよいかということは事務局の方でも提示する必要があるが、われわれ委員としても日常生活の中でいろいろな活動をしているわけで、情報は持っている。

委員：課題については優先順位をつけて絞り込んでいかないといけない。予算のこともあり、全部が全部、対応していくのは難しい。

事務局：地域の中で困りごとを解決できた事例についてもあれば、この場で紹介してもらえたらありがたい。

委員長：いまの話イメージしてもらって、次の会にも結びつけてもらいたい。倉吉市や北栄町については1層も2層も社協委託のようだが、社協から進めているのか。

事務局：事業の進め方については市町それぞれ。初めての事業であったため、それぞれが右往左往しながら模索して進めている。協議体については情報交換の要素が大きくなっている。地域サービスの創出についてはなかなか至っていない。

委員：今回のアンケート調査で町民の生の声が聞くことができる。情報量も多く、密度の濃いものが出てくると思うので、それをどう活用するか。行政として取り組むことはもちろん、地域で独自にしていくこともあるだろうし、民間の協力も得られるよう働きかけるとか、多様な方法がある。アンケート結果についてはどういったものが出てくるのか楽しみにしている。

委員長：国が目指しているのは、くまなく生活支援ができるような、ソフト面もハード面を整えていくことだと思う。特にソフト面についてはいち早くつかんで生活できるような形を検討していく。高齢者一人暮らしや高齢者世帯が増えていく状況になりつつある。

事務局：そもそも、高齢者独居や高齢者世帯が増えるという見込みがあり、公的サービスだけではそういった方々が生活が支援できないというところからこの事業が始まっている。公的以外のところで、困っている方をどうやって支えようかを考えていくのが協議体の発端である。それに近づけるようにわからないなりに進めている。イメージ的には泊地区は商店もなく、買い物に困っているだろうということは思っているが、切実な声を聞いているわけではない。アンケートを通じてそういった声が聞けたらよいと思っている。

委員：アンケートの評価とどういう形で議論の場に持ってあげるのか、どういったメンバーで協議するのが重要になってくる。地区の特性を知るためのアンケートなので、地区と関わりのない人が評価をしても仕方がない。ことによっては今回のアンケートで安心しないで、2弾目もありうる。先ほどの意見にもあったが、この協議体が理解しづらい形でスタートしている。本来は、困った事態が起きて、それをどうしようか話し合うことが一番易しいやり方だと思う。これは違うところから始まって、それを探り当てないといけない。それっておかしいのではないかということにもなるだろうが、それを言ってもしょうがない。この範囲の中でやっていくしかない。保健福祉会の事業にしても、長く続いている組織もあれば、新しくできたものもある。構成されているそれぞれの組織が何をしているのかも議論する必要がある。あまり、上物を重ねていくのではなく、いままでやってきた委員や協力員がどういう仕事をしていてどういうことが課題なのか、もう一度考えないといけない。いろいろ交錯するが、長い間積み重ねてきた事業はそれなりに経過がある。フィードバックではなく、もう一度見据えてやっていく。高齢化が進んでいる実態はある。そういう組織があるにも関わらず、ちゃんと突っていない部分があるので、しっかりやっていかないとけない。

事務局：元来社協がやってきたのは地域での生活を守ることで、それが地域福祉の概念でもある。愛の輪協力員にしてもずっとやってきているが、ある意味形骸化している部分もある。もう一度原点に立ち帰って、本来どういう活動をしていくのか見つめ直していく時期にきているのかもしれない。

委員：整理し直していくことが必要。長いことかかってあまり意味のないことをしてもしょうがない。

委員長：アンケートにしても調査物にしても、なんでこれをするか目的がある。75集落あって、何が必要になってくるのかはおそらく地域それぞれだと思う。

委員：原地区では達人クラブでボランティアとしてタイヤ交換を実施した。希望者を声かけで募ったら20台くらい集まった。今年初めての試みであったが、好評だったので、またやろうかという話になっている。高齢者や女性の方には特によかったようだ。そういうボランティア的な活動があれば話もするし、絆も深まっているのかなと思っている。達人クラブのメンバーは50代後半から70代くらい。いろんな人がおり、それぞれ得意なことがあるので、持ち寄って奉仕活動をしている。神社の掃除等も年4回くらいしている。活動の後に飲み会もあり、それも楽しみになっている。

委員：そういった活動をずっと積み上げていくのがいいのだろう。

委員：今年は雪が降らなかったが、雪が積もったときには除雪車を借りて雪かきをしたりもした。年末に餅つき行事もしたがその際に知事にも声をかけて来て下さった。

事務局：数年前の大雪が降った際に原地区がボランティアで雪かきをし、それについて知事から感謝状が贈られているので、そこからのつながりがあった。まとまった地域であるように思う。

委員長：そういうことから、助け合いが進んでいくんだろう。

委員：活動の掛け声は誰からということでもなく、みんなから上がってくる。クラブの会員は30人くらいいるが、その中でも常時でてくるのは20人くらい。

委員長：いまこういういい話が出ているが、何をやるにしても人が集まらない問題もある。リーダーの元にみんなが集まったらよいが、小さい村でみんなが生活していくには、昔のように隣近所助け合いしながら生活していくのが基本だと思う。いまはそういったことが希薄化してしまっている。人が集まっていろんな話をしたり、いい方になかなかつながっていかない。住民同士のコミュニケーションを進めたい。この会議でもそこが要になってくると思う。人と人との関わりを大事にしないとけないといけない。どこでも言われる話でもあるが、そろそろ時間になるが、なにか伝えておきたいことはないか。

委員：原地区では献上米をやることになった。この前岩美に苗の引き渡しで行ってきたところ。今年、原地区は忙しい。

委員：サロンの中で出た話だが、詐欺等の対策で、電話をかけると録音しますというアナウンスが流れるものがある。そういった機器を無償で貸してくれる自治体もあるようだが、湯梨浜町ではどうか。

事務局：現在、町の方で機器の貸し出しや補助は行っていないが、担当課である産業振興課へ確認していく。

(3) その他

事務局：この会議の委員の任期の期間が今年の9月末となっている。来年度、改選前に協議体の開催はさせていただくことになろうかと思うが、またそのときに改めて、委員の交代や引き続きについて説明させていただく。民生児童委員の改選もあるため、またそのあたりも調整させていただく。会議自体も年3回程度で夏ごろ、予算前、年度末の開催を予定しているので、よろしくをお願いします。

4 閉 会